

「帯」がのこされていた筈である。「樹帯」の中は昔の歩道より歩き良い。「樹帯」下りて、さて帰ろうと思つた時、早朝のこと意外な人物が上手の方から現れて来た、何者だろう。この雨の中、この意外な人物。「須崎さんですか。」「はい。」

#### 我が名呼ぶ異人現れ野分跡

次に、「正敏さんですか？」重ねての声にさては探しに来た人だと直観した。「見つかったぞう。」と大きな声に近くまで来ていた人達が何人も来て私を囲んだ。無意識のうちに私は坐り込んでしまった。恥ずかしさや申訳なきに涙も出ない。それでも夜から吸ってない煙草の無心をする「だれか煙草持っていますか。」早速出してくれた煙草の味。持つ手も震いがちである。一本を吸い終ると目がくらくらする今度はジュースだパンだと手に持ち切れない。尾嶺で一夜だから一滴の水も口にしない。ジュースの味は格別である。それでいて吾が身の惨めさ筆舌で現せない。着ている合羽を脱いで、「風が通さないので温くなる。」と着せてくれたのは、小山内政栄さんでかつて同じ釜の飯を食べた山の仲間である。いろいろ皆さんの気遣いありがたく身に泌みる。私は皆さんみたいに早くは歩けないだろうから杖がほしいと云ったら早速杖を作ってくれた。

「さあ帰ろう」と帰路に着く。何んとしたことだ、一夜本拠地にして歩いては帰り、にぎり飯を食べたり休んでいた処からすぐ道が開けていたのだ。ブルドーザーで地ならした土で道を少し塞いでいただけのことだ。

帰りは下り坂が多いので案外楽に歩けた。それでも肩を借そうか、腕を借そうかと気づかってくれた。皆さん思っているより私は疲れていな

いし空腹でもない、杖を持っているし地下足袋はスパイク付きだ。雨あとの道で苦にならない。

鹿の子の車道に出ると、営林署、警察署、消防署、消防団、地元の人達、かくも大がかりな捜索隊に驚きのほかはない。目、目、視線は私に集中する。穴があれば入りたいとはこんな時のことだ。

後で聞いたことだが捜索隊は三ツに分れその一隊は高橋沢の方に、今重治さんがその一隊に加わって行ったそうで、彼は私の通る舞茸木もコースも大方知っている人である。ご苦労おかけしたものである。

救急車も来る、乗れとのこと身をまかせることにし、ついに救急車の車中の人となる。

金木病院で看護婦さんが、「診察室まで歩けますか」と、私は一人で診察室まで、待っていた先生は、私のかかりつけの先生で驚かれた様子でした。点滴二時間、家族、親戚の人の心配をよそにひと眠りもする。

家に帰ると町内の皆さんが炊出しに集まってくれたのだ。友人、親戚、私の身を気づかってくれて集まってくれた人等はいっぱいである。私の不用意な山歩きがこんなにも大きな波紋を広げたものと今更ながらである。

何んと人騒せな、「木から落ちた猿ではある」それにしても、各関係機関の方々の温情に感謝しながらも、私は一生かかってもお返しのない借りを作ってしまった今、只ひたすら「平身低頭」あるのみである。

○飯喰う野猿となりて夜の寒さ ○疲れない眠らぬ鉄則夜長越す

○迷路から外れて土肌冷まじや (遠く人声らしきを感じる) 早朝

○煙草火も絶たれ手探り闇夜長 ○人声か耳そば立てて消す野分け

(一九九五・一〇・一三)

## 鳴海家の由来

### 鳴海 勲

元和(二六一五) 嘉瀬に承暦(一〇七七)ー(一五五八)の年間に安倍一族の築かれたゆかりの嘉瀬八幡館があり夷族の住みたる土地で飯詰高寛永(二六二四) 楯城の配下であった。

正保(二六四四) 夷族は機敏にて戦が上手津軽為信が数年攻めたるも夷族が馳せ参じるのでなかなか落城させる事が出来なかった。そこで、夷族慶安(二六四八) を攻めるには飯詰高楯城の下を通らなければならぬので遠い方の川を通り山越えして小田川林道を通り天正十五年九月先づ帰承鷹(二六五二) 来地館、加勢館の西館、東館攻め落とし八重、佐介主従皆討死し続いて三浦氏、浜館氏も城枕に放炎して果てたり(老若男女一人残らず討ち殺したり)茲に飯詰高楯城の命脈絶たれたり

寛文(二六六一) 鳴海先祖は名古屋の成海の郷に住み豊臣家の家臣であった。その故に大阪夏の陣で豊臣家が亡ぼさたので身の危険を感じて兄弟延寶(二六七二) 二人が東日流へ、一人は能代へ一人は嘉瀬へ逃れたのである。(天和二年頃)

天和(二六八一) 貞亨(二六八八) 元禄三年八月田舎庄金木組嘉瀬村百姓持高反別帳 百姓善右衛門 作人八十郎

田畑都合 四町一反二十一歩 年貢米料領収書

寶永(二七〇四) 寶永五年十二月十九日 徹寒善翁居士 寶永十月二十三日 長忠榮松大姉 寶永七年八月四日 聊道添圓居士

正徳(二七一)

享保(二七二六) 享保二年十一月二十日 寒山梅壽居士 享保十六年十二月十八日 妙雲寂道大姉 享保二十一年三月二十八日 智白道善居士

元文(一七三六) 鳴海家の人はあまりにおとなし過ぎるので村人からはいくちなすと見られ奴踊りの歌にもある毎く「稲妻(いなづま)びかびか、雷(かみなり)ごろろ  
寛永(一七四一) いぐち無し親父、蕎麦(そば)株(むら)さききた来や、千両箱(せんりょうば)拾(ひろ)った」とうたいはやされたのである。  
延享(一七四四) 今度(こんど)生まれた後(のち)継(つ)ぎには熊次郎(くまじら)と言う猛(もう)しい名前(な)をつけたが猛(もう)しくなかった。金木(きんぎ)から荒(あ)らしに来(こ)るので仲(な)が悪(わる)く、嘉瀬(か)の人が  
延享(一七四四) 金木(きんぎ)に行く(い)くと叩(たた)かれる金木(きんぎ)の人が嘉瀬(か)に来(こ)ると叩(たた)くと言う仲(な)が悪いのでそれを歌(う)ったのが、「嘉瀬(か)と金木(きんぎ)の間の川(が)こ小石(こいし)流(なが)れて  
寛延(一七四八) 木の葉(は)が沈(しず)む」と唄(うた)い継(つ)がれてきたものである。奴達(やつら)は館(くわん)を守(まも)って帰(かえ)りには、「嘉瀬(か)と金木(きんぎ)の間の川(が)こ、小石(こいし)流(なが)れて木の葉(は)が  
沈(しず)む」唄(うた)いながら帰(かえ)って来(こ)たそうだとすると主人(しゅじん)が奥(おく)から出(で)て来(こ)て今(いま)何(なに)候(こう)と言(い)って奴達(やつら)を慰(なぐさ)めたそうです。

寶曆(一七五一) 寶曆(ほうりき)五年(ごねん)三月(さんげつ)一二日(にじふににち)永傳院(えいでん)春清(はるきよ)居士(くわし)熊次郎(くまじら)六十五(むそご)歳(さい) 寶曆(ほうりき)十年(じゅうねん)八月(はちげつ)朔日(しつにち) 永贊院(えいさん)全相(ぜんさう)妙身(めうしん)大姉(だいし)  
善九郎(ぜんくわ)より善六(ぜんろく)彦(ひこ)一(いつ)善七(ぜんしち)務(む)善八(ぜんぱち)力(りき)分家(ぶんけ) 田畑(たは)一町(いちまち)一反(いつはん)三畝(さんぼ)二十步(じゅうしほ) 作人(さくじん) 八十郎(はちじゅうりやう)  
寶曆(ほうりき)八年(はちねん)八月(はちげつ)金木組(きんぎぐみ)嘉瀬村(か)田畑(たは)高反(たかはん)別帳(べつちやう) 田畑(たは)一町(いちまち)二反(にはん)一畝(いちぼ)四十步(しじゅうしほ) 作人(さくじん) 善右エ門(ぜんゑもん)  
安永(あんゑい)九年(きゅうねん)六月(むつき)二十四日(にじゅうよんにち)天下(てんか)泰平(たいへい)奉納(ほうな)大乘(だいじやう)妙日本廻(めうじやうめい) 為施(ためし)二世(にせ)太平(たいへい)泰樂(たいらく)日月(にちげつ)清明(せいめい) 鳴海氏(なるみし)  
安永(あんゑい)九年(きゅうねん)八月(はちげつ)朔日(しつにち) 眞勝院(まかつ)耳節(みみせつ)智性(ちじやう)居士(くわし) 文化(ぶんか)四年(しごねん)一月(いちげつ)十三日(じゅうさんにち) 眞榮院(まゑい)春山(はるやま)妙性(めうじやう)大姉(だいし)  
善九郎(ぜんくわ) 六十四(むそじゅう)歳(さい) 妻(つま) 八十一(はちじゅういち)歳(さい)

天明(ていめい)(一七八一) 寛元(かんげん)四年(しごねん)四月(しげつ)吉日(きつにち) 上方(かみかた)道中(だいちゆう) 鳴海善工門(なるみぜんこうもん)  
寛政(かんせい)(一七八九) 寛政(かんせい)三年(さんねん)八月(はちげつ) 特抱(とくほう)高反(たかはん)別張(べつちやう) 七町(しちまち)六畝(むくぼ)一二步(じふにしほ) 百姓(ひやくしやう)善工門(ぜんこうもん)  
享和(きやうわ)(一八〇一) 文化(ぶんか)九年(きゅうねん)二月(にげつ)五日(ごにち) 慈慧院(じゑい)壽岳(じゆがく)導榮(だうゑい)居士(くわし) 六十(むそ)歳(さい) 天步(てんぷ)八年(はちねん)十月(じゅうげつ)十九日(じゅうくにち)  
文化(ぶんか)(一八〇四) 文政(ぶんせい)二年(にねん)五月(ごげつ)七日(しちにち) 高野山(たかのやま)遍照(へんしやう)尊院(そんゐん)にお参(ま)り、鳴海善工門(なるみぜんこうもん)子息(しよしき)善吉(ぜんきち)請證(せいじやう)文(ぶん)之事(じ)  
文政(ぶんせい)(一八一八) 文政(ぶんせい)九年(きゅうねん)年貢(ねんこう)無調(むてう)達付(たつづ)家財(けざい)けつ 処(ところ)被仰付(おほせうづ)け、取払(と)り節(せつ)棟木箱(むねぎば)一個(いっごう)有(あ)り之(の)右(みぎ)之(の)箱(はこ)之内(うち)御証(ごせい)文(ぶん)老通(らうとう)有(あ)り、此度(このたび)へき地(ぢ)へ被渡(おほ)候(こう)為(ため)、養生(いんじやう)粟七(むぎしち)  
斗借(とせ)用致(ようぢ)、若婦(わが)国(くに)於(お)無(な)之(の)時(とき)將軍(しやうぐん)家約(けやく)束頂(すくじやう)戴(たい)処(ところ)者也(なり)  
文治(ぶんじ)四年(しごねん)四月(しげつ)一八日(じゅうはちにち) 伊豫(いよ)守義判(しゆぎはん) 武藏坊(むさざうぼう)弁慶(べんけい) 亀井(かめい)六郎(むろ)祐重(すけしげ)(以下(以下)省略(りやうりゃく)) 浅田(あさの)村物(むらもの)兵衛(べいゑい)にある写(し)し  
天保(てんぽう)(一八三〇) 天保(てんぽう)九年(きゅうねん)八月(はちげつ) 上方(かみかた)かける(か)る(る)に(に)行(い)った(ら)時(とき)の御寺(ごてい)証文(せいぶん)有(あ)り

「昔馬(むかしうま)を川(が)に水浴(すゐよく)びに乗(の)って行(い)った(ら)帰(かえ)りに馬(うま)の尻尾(しつぽ)にぶら下(ぶ)が(っ)てきた(ら)河童(かどう)納屋(なぐら)の内(うち)にはいる(ら)や否(いな)や、あひぎつ(馬(うま)に食(く)べ  
させるに飼(か)い草(くさ)を入(い)れおおくもの)破(やぶ)って隠(かく)れた。そこであひぎつを壊(こ)して捕(と)らいたら今度(こんど)嘉瀬(か)の子(こ)ども達(たち)を捕(と)らないから勘弁(かんべん)  
してくれとお願(ねが)ひしたので許(ゆる)して川(が)に放(はな)してや(っ)ったと言(い)う。」この事(こと)は大正(たいしやう)時代(じだい)にとよしの神様(かみさま)が貴方(あなた)内(うち)に河童(かどう)神様(かみさま)が授(たま)か(っ)てい  
るから怪我(けが)した人(ひと)を揉(も)んでや(っ)ると治(な)る。と言(い)った。

## 会員名簿

顧問	外崎 三千男
会長	木村 治利
副会長	沢田 政孝
兼會計	山中 正津
編集局長	小山内 嘉一郎
会員	須崎 正敏
	山中 長三郎
	沢田 薫
	秋元 惣之進
	秋元 清逸
	木立 久二
	木下 清一
	原田 万治

## II あとがき II

少年は夢(未来)を語り、老人は昔(過去)を語る。  
五十年前、その時私は特別企画には全員の稿(記録)が欲(欲)しかった。現(現)会員の誰(誰)にも五十年前(五十年前)はあ(あ)った(ら)の(の)だから。各(各)人(人)それぞれ(それぞれ)の思(思)い出(出)話(話)がその時(その時)代(代)の世相(せさう)を記(記)録(録)でき  
た筈(はず)だ。  
次に、もう死語(しご)にな(な)って(も)よ(よ)いと思(思)いたい戦(戦)争(争)中(中)の用(用)語(語)をい(い)くつ(つ)か記(記)して、あ(あ)とがき  
の代(代)り(り)と(と)し(し)たい。  
○大詔奉戴日(たいしやうほうたいび) ○赤紙(あかがみ)召集令状(しゆしゅうしやう)のこと ○千人  
針(せんぢ)・千人力(せんぢにんぢり)・せんぢにんぢから ○慰問袋(いもんぶくろ) ○軍事教練  
(ぐんじきやうれん) ○竹鎗訓練(たけやりくんれん) ○B29(米軍陸軍航空隊の重爆  
撃機) ○警戒警報(けいかいけいほう) ○空襲警報(くうしゅうけいほう) ○燈火管制  
(とうかかんせい) ○焼夷弾(しょういだん) ○防空壕(ぼうくうごう) ○防空頭巾  
(ぼうくうずきん) ○絨毯爆撃(じゅうたんぱくげき) ○疎開(そかい) ○隣組(とな  
りぐみ) ○徴用(ちやうよう) ○女子挺身隊(じょしていしんたい) ○大政翼賛会(た  
いせいよくさんかい) ○特高(とくこう) (特別高等警察) ○非国民(ひこくみん) ○国民学校(こ  
くみんがっこう) ○奉安殿(ほうあんでん) ○代用食(だいようしょく) 配給制(はい  
きゅうせい) ○愛国婦人会(あいこくふじんかい) ○国防婦人会(こくぼうふじんかい)  
○玉碎(ぎよくさい) ○英霊(えいれい) ○復員(ふくいん)  
まだまだあるが、再び使(使)いた(ら)くない言(言)葉(は)を三十語(さんじゅうご)ほど並(並)べてみた。

## II 表紙解説 II

今回は、ご覧のとおり第一集から第十集までの表紙絵をずらり並べたもので、解説することもないだろうが、各集の表紙絵の写真撮影者を紹介して解説の代りとする。

第一集	「人丸の神石」	撮影者・山中正津
第二集	「嘉瀬奴踊り発祥地の碑」	木下清一
第三集	「桃地蔵」	木村治利
第四集	「嘉瀬妙光庵寺宝・地獄絵」	木下清一
第五集	「嘉瀬八幡宮」	山中正津
第六集	「三縞ごぎん」	木村治利
第七集	「津軽凧絵」	山中正津
第八集	「嘉瀬奴踊りの歌詞・タタラビ花」	山中正津
第九集	「お城山の空壕跡と柵」	山中正津
第十集	「清久溜池の白鳥」	木村治利

昭和五十二年四月、嘉瀬ふるさとを探る会の発足から四年目にしてはじめて記録誌「かたりべ」が発行された。会の第一回の形に現われた事業は「人丸の神石」を嘉瀬八幡宮境内への遷座でした。それで、第一集の表紙には「人丸の神石」ということで第一回の編集会議で決めた。第二集から第十集までの表紙絵の決定は、いつも最後の編集会議で決めるようになった。

— 山中 —

## かたりべ第十一集

発行 平成八年七月  
発行所

(電話)  
発行者 木村治利  
編集人 山中正津  
印刷所 朝日印刷

五所川原市一ツ谷  
(電話三四一三三一六)



伊藤忠吉記念図書館



1090003802